

武道で世界と対峙する男

菊野克紀



聞き手／山口日昇

元来ボクは気が弱くてビビり！
 どんなに競技者として強くても
 素人に殺されることだつてありえる
 だからこそ「ルールの強さ」にも
 興味があるんです

柔道、空手をバックボーンとし、日本の格闘技団体で活躍してきた菊野克紀は現在、MMA世界最高峰の舞台といわれるUFCを戦場にしている。体系化されたセオリーの中での競争が求められるUFCにあって、沖縄の伝統空手にこだわったり、巖流島が紹介した「ガチ甲冑合戦」への参加を望んだりといった菊野の姿勢は異彩を放つ。競技としての格闘技と、実戦に根ざした武道を同時に追及する菊野にとって“闘い”とは何を意味するのか？

山口 菊野さんには選手としてというより、人として変わつてるなあという印象があるんですよね。

菊野 ああ、はい（笑）。

山口 好奇心が向いている角度が面白いなあ。しかも現役バリバリなのに。いまの格闘技界の中では、独特の感性を持つてると思います。

菊野 はい。ボクはこの業界で浮いてますからね。

山口 あ、自覚してる（笑）。

菊野 そりやあもう自覚してます。沖縄拳法空手という武術をやっている時点で、他にそんな総合格闘家はいないですから。大真面目に棒とサイを振ってますからね。

山口 ネットでの自分の評判なんかはチェックするタイプですか？

菊野 目にすることもありまますよ。

山口 どんなことを言われている印象が強いですか？

菊野 好意的な場合は「武道家らしくていい」とかです。否定的な場合は、「武道なんてやってる場合じゃないだろ」という感じ。「ボクシングやったり、レスリングやったりしろよ」という感じですよ。

山口 いわゆる西洋的で科学的な、UFCで勝つためのトレーニングを積めと。

菊野 僕は勝つためにやってるんですけどね……。沖縄拳法空手は、というか武術は超科学的なんです。最近よう

やくスポーツ科学が武術に追いついてきたかなって感じですよ。だつて弱ければ死ぬ時代にできたんです。そこに使えないものが入り込む余地なんかありませんよ。負けたら死ぬんですから。家族が殺されるんですから。でも武術の凄さはわかりにくい。そして本物も多くはない。だからそう言われるのはしょうがないですけどね。

山口 フルコンタクト空手だったりだと周りもイメージしやすいと思うんですけど、武術空手となると奥行きがわからないので、すごさを伝えるのは容易ではないですよ。もともと「奥」に興味があるタイプなんですか？

菊野 そうですね。漫画『修羅の門』を読んで、陸奥圓明流（むつえんめいりゅう）という1000年前に生まれた武術が出てきて、武術というものに興味を持ちました。もともと子どものころはプロレスを見たり、競技者として柔道をやったりしてましたが、『修羅の門』を読んで「強さ」っていわゆる競技的な強さだけじゃないんだなと思うようになったんです。競技の場合は、あくまでルールの中の強さであつて、そうじゃない強さもあると知つてからはズツとそういう視点で見えています。

山口 もともとはドラゴンボールやジャッキー・チェンに憧れて、中学で柔道を始めて、高校3年の最後のインターハイで、1年生の相手に負けてしまったんですかね？

菊野 はい、ありがとうございます！